平成3年(1991年)4月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
4　APRIL, 1991　毎月10日発行　第132号

教皇様の声

なぜ、このように悲しい計画を？

聖週間を迎えて、イエズスの十字架上での死に至る出来事を黙想しています。福音書をみると、主は自らの犠牲について前もって話し、弟子たちがこれから受ける大きな試練に対し心構えができているよう準備なさっています。それはフィリッポのカイザリアでペトロが信仰告白した後のことでした。キリストは神秘に包まれた御父のご計画を明らかにされたのです。「人の子が多くの苦しみを受け、長老や司祭長や律法学士らに見捨てられ、ついに殺され、三日後によみがえる。」(マルコ8・31)

思いがけない事であったので、ペトロはこの言葉を受け入れられません。苦しむ救い主の秘義を理解できなかったのです。イエズスへの信仰を告白したペトロは、勝利と栄光に向かう救い主を信じていました。

ペトロは叫びます。「主よ、そんなことは起りませんように。」(マテオ16・22)　苦しみが人間生活の一部をなしていることを認めない人々は、今日再びペトロの叫びを繰り返します。しかしそれは「神の考えではなく人間の考え」(マテオ16・23)であることを、イエズスははっきりとペトロに言われました。御父のご計画、すなわち苦しみと死の道が必要であることは、イエズスの目には明らかでした。長老や司祭長たちによる拒絶、人々の憎しみ、弟子たちの離散など、イエズスは肉体的にだけでなく、精神的にも苦しまれました。

あるときイエズスは、なぜこの世に来られたかを説明されました。「人の子が来たのは……多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである」(マルコ10・45、マテオ20・28)と。十字架は、イエズスが歩み始められた旅路に起った偶然の出来事ではなく、人類の贖いのために意識的に望まれたことだったのです。

なぜそのような悲しい計画だったのでしょうか。それは、この世を罪から解放するためでした。御父は、御子が罪の結果の重荷を引き受けることを望まれたのです。このような決定を考えると、罪の重大さがよくわかります。罪の行きつくところは破滅ですから、罪の重大さを軽減することができなかったのです。神に対する侮辱である罪は、人間であり神である御方でなければ取り除くことができなかったのです。

世の救い主として来られた御子は償いと愛を御父に捧げられ、人類のために、罪の赦しと神の生命への交わりを得てくださいました。人間の歴史に起ったただ一度の犠牲は、あらゆる時代、あらゆる場所、あらゆる人々の救いのための犠牲になりました。それはご聖体において常に新たにされる犠牲です。とりわけ明日は心をこめて、キリストが最後の晩餐で行われたことを再現し、再び犠牲を捧げましょう。

十字架にかけられた救い主は、私たちのために自ら犠牲となられたのです。「友人のために命を与える以上の大きな愛はない。」(ヨハネ15・13)

キリストによる犠牲は私たち全てに多くのことを教えます。愛は苦しみを通って頂点に達しました。キリストは私たちが贖いの使命の協力者になることをお望みでしたから、私たちも主の十字架を共に担わなければなりません。生活の中で必ず出遭う苦しみをキリストのただ一度の犠牲に一致させなければなりません。

愛による犠牲は、尽きることのない実りをもたらしました。苦しみは障害や破壊的現状であると思うでしょう。イエズスの命にとどめを刺した十字架の刑を考えると、その使命が失敗に終ったように思うかもしれません。しかし、そうではないのです。十字架において、救い主は使命を成就されたのです。イエズスは言っておられます。「まことにまことに私は言う。もし一粒の麦が地に落ちて死なぬなら、ただ一つのまま残る。しかし死ねば多くの実を結ぶ。」(ヨハネ12・24)

犠牲によって、人類に豊かな生命の実りがもたらされました。「そのとき一人の兵士がやりで脇を突いたので、すぐ血と水が流れ出た」(ヨハネ19・34)と、ヨハネはカルワリオでの出来事を語っています。預言者ザカリアが「彼らは自分たちが刺し貫いた人を仰ぎ見る」(ザカリア12・10、ヨハネ19・37)と言っていたように、多くの人々が十字架上のイエズスの傷ついた御脇腹を仰ぎ見ました。聖金曜日には、人類に一度に全てを与えられた愛の印、キリストの刺し貫かれた聖心を仰ぎ見るでしょう。その愛は、脇腹から流れ出た血と水が象徴する恩寵の泉となりました。多くの言葉が示すように、この血と水は、主が約束してくださった「生きる水の川」(ヨハネ7・38)の源泉でした。

犠牲によって示された愛は、十字架がキリストにとって敗北ではなく勝利であったことを示しています。それは悪の力にまさる勝利、憎しみと暴力にまさる謙虚な愛による勝利、利己主義と傲慢にまさる完全な自己奉献の勝利、私たちを信仰と希望に招く勝利でした。「私は地上から上げられて、すべての人を私のもとに引き寄せる。」(ヨハネ12・32)

勝利は復活によって明らかです。イエズスは復活を背景に、受難と死を見ておられました。復活のことも告げておられました。人の子が苦しみを受けて死ぬことだけを話されたのではなく、三日目によみがえることも付け加えておられました。復活と死は切り離せません。復活が、死に完全な意味を与えます。十字架の道は栄光に輝く勝利につながっていました。

イエズスは弟子たちに言われました。彼らもイエズスの受難だけでなく、勝利にも与るであろうということを。「あなたたちは泣き悲しみ…その悲しみは喜びに変わる。」(ヨハネ16・20)

聖週間中、キリストの受難に加わり、それが復活で締め括られたことを心に留めて黙想しましょう。復活祭の輝ける出来事を考えると、あらゆる悲しみが無力になり、神秘的な神のご計画を心から感謝するように導かれるでしょう。そして、贖い主キリストにしっかりと結ばれて、苦しみから完全な喜びを得るでしょう。

(90・4・11　聖水曜日)

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1991

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

第八番目の回勅〈レデンプトーリス・ミッシオ〉（贖い主の使命）抄訳

〔教皇様は回勅の最初の方で幾つかの疑問を提示し、後でそれに答えておられます。〕

非キリスト者の間での宣教は今も意義があるのだろうか？

キリストは人類の唯一の救い主、神を啓示し、神に導くことのできる唯一の御方です。（№5参照）

福音を告げ、まだ教会のない国々やグループの間に新たに教会をうち建てんという熱意を生き生きと保たなければなりません。なぜなら、これこそすべての国、地の果てまで遣わされた教会の最も重要な任務だからです。（№34参照）

諸宗教間の対話が福音宣教の替りをしているのではありませんか？

諸宗教間の対話は教会の福音宣教の一部です。互いに知り合い高め合う手段としての対話は、諸国民への宣教と対立するものではありません。第二バティカン公会議とそのあとの教導職が主張するように、救いはキリストから来ます。また対話は福音宣教を免除するものではありません。（…）教会は救いの通常の道であり、教会のみが救いの手段をすべて完全に持っているという確信のもとに、対話を始め、対話を続けなければならないのです。（№55参照）

人間の福祉促進こそ、教会が有する使命の適切な目的ではありませんか？

現在の誘惑は、キリスト教を単なる人間的な知恵、ひとつの良い生き方に過ぎないと考えることです。（…）確かに、人間のための戦いがなされていますが、そこでいう人間は中途半端な人間、地平面に限られた人間になりさがっています。（№11参照）

教会と宣教師たちも発展の促進者であるのは確かです。（…）しかし、一国の発展は金銭や物的援助や技術構造からではなく、どちらかと言えば、良心の形成、考え方と習慣の円熟から来るものです。（№58参照）

宣教活動とはもっぱら貧しい人々を助け、進歩を促し、人権を擁護することであるかのような視野の限られた宣教観を与えてはなりません。宣教する教会はこれらの分野においても責任を持っていますが、それにも拘わらず教会の根本的な使命は他にあります。貧しい人々は神に飢えているのであって、食物と自由のみに飢えているのではないのです。（№83参照）

良心と自由を尊重するのなら、回心を呼びかけるようなことはできないのではありませんか？

キリストを告げ知らせ、キリストの証人として働いても、人々の良心を尊重するかぎり、自由を犯すことにはなりません。信仰は人間の自由な受入れを要求します。しかし、同時に信仰は提示されなければなりません。人々はキリストの秘義の豊かさを知る権利があるからです。（№8参照）

教会は人々の自由を尊重します。教会の使命は、自由を制限することではなく、自由の促進を計ることです。教会は提示しますが、強制しません。教会は個人と文化を尊重し、また良心の聖域を尊びます。（№39参照）

聖霊に導かれた使徒たちは、人々に生活を改め、回心し、洗礼を受けるよう勧めました。（この洗礼の大切さを強調しなければなりません。）なぜなら、諸国民への宣教がなされるべき所で洗礼を不必要だと考え、キリストへの回心を洗礼の秘跡から切り離す人がいるからです。（…）キリストへの回心が洗礼の秘跡に結び付いているのは、それが教会の慣行であるだけでなく、使徒たちを遣わされたキリスト御自身の御旨だからです。（№47参照）

どの宗教に従っても救われるのではありませんか？

二つの真理を切り離してはなりません。すなわち、すべての人はキリストにおいて救われるという現実的な可能性と、その救いを実現するための教会の必要性。（…）救いは、常に聖霊の賜ですが、自らを救い、人々を救うために、人間の協力を要求します。これが神の御旨であり、このためにこそ教会が確立されたのです。（№9参照）

福音宣教に対する関心を失う原因の最たるものは、悲しいことですが、キリスト者の間に広がっている無関心です。それは、間違った神学的展望から出たもので、宗教はどれでも同じだと考える宗教的相対主義に冒された無関心です。（№35参照）

（91・1・22）

復活の確信は弟子たちの経験に基く

1

今日、私たちはイエズス・キリストにおける私たちの信仰の頂点をなす真理について考察しています。その真理は初代キリスト教共同体の信仰と生活にとって最も重要なものでした。また、信仰の基本的な要素として聖伝によって伝えられ、決して真のキリスト信者によって無視されるようなことはありませんでした。今日では深く分析され、十字架と共に過越しの秘義の本質的なものとして研究され、宣教されています。その真理とは、キリストの復活の真理です。使徒信経は「三日目に死者のうちよりよみがえり」と教え、ニケア・コンスタンチノープル信経は「聖書にありし如く、三日目によみがえり」とつけ加えています。その真理は、実際に歴史的に起り、実証された事実に基づいたキリスト教信仰の秘義です。私たちは、教義に表され、その事実に含まれている秘義を（頭を下げ謙虚な心で）調べていきましょう。それでは、復活の真理を証明する聖書からみていきましょう。

2

キリストの復活に関する文書による最初の証言は、聖パウロのコリント人への手紙の中にあります。（紀元57年の復活祭の頃）この手紙でパウロは「私が第一にあなたたちに伝えたことは私自身受けたことである。すなわち聖書に記されているとおり、キリストは私たちの罪のために死に、葬られ、聖書に従って三日目によみがえり、ケファに現れ、また十二人に現れ、そののち五百人以上の兄弟に同時に出現された。その中には死んだ者もあるが、ほとんどは今なお生きている。次にヤコボに現れ、それからすべての使徒に、最後には月足らずのような私にも出現された」（①15・3～8）と書いています。

聖パウロはここで明らかに、ダマスコへ向かう途中での改心の後知るようになった、復活の生きた聖伝に

★「拓」（ひらく）

ホセマリア・エスクリバー著
新田壮一郎訳　定価一六四八円

説教・講話・書簡等の抄訳

ついて述べています。(使徒行録9・3～18参照) エルサレムへ行った時パウロはガラツィア人への手紙(1・18以降)に書いたように、使徒ペトロとヤコボに会いました。そして今、パウロは復活したキリストの証人として、この二人の使徒について述べています。

3 先に引用した手紙でパウロは、復活について(聖書にあるとおり)三日目に起ったこと(事実の神学的側面に触れている聖書の言葉)として話しているだけでなく、同時にキリストが個人的に姿を現された目撃者にも拠り所を求めていることに気づきます。それはコリント人への手紙にもあるように、初代の共同体の信仰が信者の間に知られており、そのほとんどが、まだ共に生きていた実際の人々の証言に基づいていることを示しています。「キリストの復活の証人」(使徒行録1・22参照)たちとは、まず第一に十二使徒であり、彼らだけでなくペトロ、ヤコボ、そしてすべての使徒たちに現れた他、同時に五百人以上の人々に現れたとまで言っています。

経験の基礎の上に

4 パウロの手紙を前にして、キリストの復活を肉体的な面から考えて歴史的事実として認められず、別の方法で解釈しようとする仮説は受け入れられません。例えば、復活は死後のキリストの(死んでいるのではなく生きている)状態の一つであるとか、復活とはキリストが死後弟子たちに実際に与え続けた新たな強い力、影響力にすぎない、としています。これらの仮説には復活の現実に対する偏見が含まれているようです。復活を状況として、すなわちエルサレムの共同体の(産物)と考えているのです。それらの解釈にも偏見にも、事実の裏付けはありません。それとは反対に、パウロは先に引用した手紙で(事実)の目撃者に根拠を置いています。ゆえに、キリストの復活に対するパウロの確信は経験に基づいているのです。それは、エルサレムの初代の共同体で使徒たちによって選ばれ、従っていた事実からくる根拠に結びつけられています。イスカリオトのユダの裏切りと死によって欠けていた(12)の数を満たすため、イエズスと常に共にいた弟子の一人であるマティアが選出された時、使徒たちは選ばれる者の条件として、イエズスが教え、活動なさっていた間彼らとともにいたというだけでなく、「私たちを離れて昇天された」(使徒行録1・22)という出来事まで体験した「復活の証人」でなければならないと要求していました。

5 それゆえに復活は、歴史的資料にほとんど敬意を示さないある種の新約聖書批判がしているように、エルサレムでの初代のキリスト教共同体の(産物)として示すことはできません。復活の事実は、過越祭前後の使徒たちや弟子たちの信仰の産物ではありません。聖書を見ると、キリストの信者たちの過越祭以前の信仰は、師の受難と十字架上の死という極限的な試練のもとに置かれていたことがわかります。キリスト御自身この試練について、エルサレムでの悲劇的な出来事がまさに始まろうとしていた時、特にシモン・ペトロに向けられた言葉で予言されました。「シモン、シモン、サタンはあなたたちを麦のようにふるいにかけることができたが、私はあなたのために信仰がなくならぬようにと祈った。」(ルカ22・31～32)　キリストの受難と死による動揺はたいへん大きかったので、弟子たちは(少なくとも何人かは)復活の知らせを初めは信じようとしなかったのです。どの福音書をみてもこのことはわかります。特にルカは婦人たちが「墓から帰り、これらのことを十一人とほかのすべての人たちに告げた。(…)彼らにはそのことばがたわごとのように思えて、彼女たちの言うことを信じなかった」(24・9～11)と伝えています。

Rerum Novarum 100

労働問題の性質は変わったが、仕事の原理は変わっていない

こんにち、「仕事の文化」という言葉がよく使われますが、表現上の誇張や煽動的な要素を除けば、確かに肯定的で意味深い言葉だと言えます。事実、仕事のほんとうの性質に従って働き、またそのように仕事を理解するなら、仕事は文化の基本的な要素であることが分ります。近代になって仕事が再評価され、仕事の向上が計られましたが、それには人間の努力だけでなく、新旧両約聖書に含まれている啓示が決定的な役割を果しました。啓示から「仕事の福音」と称される一連の実行計画を引き出したのです。(回勅『働くことについて』25番以下参照)

人間の携わる活動がどのような種類のものであれ、すべて仕事には、それが示し具体化する人間的倫理的価値があり、経済的生産的な面を越えた仕事自体の尊厳が備わっているのです。したがって、仕事に携わる人々が自分の仕事について明白で啓発された考えをもつ必要があります。また、仕事を取り巻く諸条件は働く男女の必要と要求に応えるものでなければなりません。

これこそ教皇レオ13世が回勅「レールム・ノヴァルム」で述べたことです。教皇は、仕事の尊厳を主張し、支持し、働く人一人ひとりの権利を強調されたのです。

十九世紀末という歴史的な状況を考えると、当時「仕事の問題」が社会生活の中で最も重要であったことに疑いを挟む余地はありません。その当時の状態は人々を憤慨させ、貴重な権利を踏みにじる仕事の形態や構造に対して時には反抗させるほどであったからです。

今日の状況は当時とは異なります。しかし重要なことは、教皇が労働者の神聖な権利を認め、雇用者に正義を守る重要な義務を思い起させたことです。それと同時に、教皇は仕事の尊厳だけでなく質素と倹約の意味も教えました。「神御自身の考えによれば、貧しさは屈辱ではない。」だから、「額に汗を流しながら食物を求めねばならないことを恥じてはならない。」レオ13世はこう言った後で、イエズスの模範にふれ、「神の御子でありながら、御生涯の大部分を大工の仕事のうちに過ごされた。彼は大工の子だ。(マルコ6・3参照)」

今日、全般的に言えば、世界の経済的社会的な状態はレオ13世の時代と比べてずいぶん変わってきました。ところが周知のように、残念ながら第三・第四世界があり、そこには広範な貧困と悲惨の地域が含まれています。場合によるとこの地域の方が前世紀の労働者階級よりずっと悪い状態にさえなっています。これらの国々にとって偉大な教皇の教えは今も時を越えて有効であると言えます。発展国にとって教皇の教えは、仕事の高貴さについて、また創造主なる神の御旨に従い自分の働きを通して地を支配し、自分を完成させる人間の真理に仕事を合わせる必要について、現在もなお有効です。

夫ヨセフと御子イエズスと一緒に家庭のむつまじい雰囲気の中で慎ましい仕事に精を出した、いとも聖なるマリアに私たちが仕事についてこのような考えができるよう、お願いしましょう。

(91・2・10)

★「召しだし」(再版)
ホセ・ルイス・ソリア著
新田壮一郎訳　定価七〇〇円

不変の教え

6 復活を使徒たちの信仰の産物であるとする仮説は、イエスが「彼らの中に立ち、『あなたたちに平和』と言われた」時に起ったことによっても反論できます。事実、使徒たちは「幽霊を見ているのだと思」い、イエズス御自身が彼らの疑いと恐れを除かれ「『私自身だ』と納得させなければならなかったのです。「『触れて確かめよ。あなたたちの見ている私のこんな肉と骨は霊にはない。』」それでも彼らは「喜びのあまり信じられず、驚いていると、イエズスは」、彼らに何か食べ物を出すように命じ「彼らの前で食べ」たのでした。(ルカ24・36～43参照)

7 さらに、トマのエピソードもよく知られています。イエズスが閉じられていた戸から高間にお入りになり、最初に弟子たちの前に現れた時、トマはその場にいませんでした。(ヨハネ20・19参照)「ほかの弟子たちが『主を見ました』と言ったが、彼は『私はその手にくぎの跡を見、私の指をそのくぎの跡に入れ、私の手をその脇に入れるまで信じません』と言った。八日の後、イエズスは「疑っている」トマの要求に応えるため再び高間においでになり、「『あなたの指をここに出して私の手を見なさい。あなたの手を出して私の脇に置きなさい。信じない者でなく信じる者になるように』と言われた。トマは『私の主よ、私の神よ』と」いう言葉で信仰を宣言した時、イエズスは彼に「『あなたは私を見たから信じたが、私を見ずに信じる人は幸いである』」と言われました。(ヨハネ20・24～29)

神とキリストの秘義に隠されているものを見たいと要求せずに信じるようにとの教えは、常に根拠のあることです。しかし、生きているキリストの出現を個人的に体験することなく復活を受け入れるということに対するトマの頑なな態度と、その後キリスト御自身によって示された証拠を前にして彼がとった従順な態度は、キリストの復活を受け入れることへの使徒や弟子たちのためらいを記した福音書の証言を立証するものです。従って、復活が使徒たちの信仰（または信じやすさ）による（産物）であるとする仮説は論理的ではありません。反対に、彼らの復活に対する信仰は、神の恩寵の働きのもと復活したキリストの現実を直接体験したことから生れたものだからです。

8 復活の後、弟子たちに現実であるという意識を持たせ、幽霊を見、幻に惑わされているのだという彼らの考え（恐れ）を払うために、イエズスは弟子たちに近づかれます。実際に、イエズスは弟子たちとの直接のふれあいを通して彼らに会われました。先ほどのトマの場合がそうですし、またイエズスが、恐れている弟子たちに「『触れて確かめよ。あなたたちの見ている私のこんな肉と骨は霊にはない』」(ルカ24・39)と言われています。イエズスは、弟子たちに出現した復活した体が、苦しみを受け十字架にかけられた体と全く同じものであることを確かめるよう招いておられます。しかし同時にその体は新しい性質をもっていました。「霊的なものになり」「光栄を受けていました。」　それで、人間の体がもつ物理的限界を超えることができるのです。(実際に、イエズスは戸が閉じられていたにもかかわらず高間にお入りになり、姿を現したり消したりなさった。)　けれどもその体は正真正銘の本物の肉体です。その肉体的な同一性の中に、キリストの復活の証拠があるのです。

9 ルカの福音書に記されているエンマウスへの途上での出会いは、復活されたキリストと語り合うことによって、復活に対する確信が弟子たちの意識の中で固まったことを特に明らかに示している出来事です。(ルカ24・15～21参照)　最初二人の弟子は、自分たちの師が十字架につけられた日の出来事の記憶で悲しみに沈んでいました。二人は、イスラエルに解放を与えるメシアとしてイエズスにかけた望みが崩れ去るのをみて、失望を隠すことができませんでした。(「私たちは、イスラエルを救うのはその方であろうと望みをかけていました。」)　その後、自分たちと話してきた見知らぬ人がキリスト御自身だということがはっきりした時、二人は完全な変化を経験し、キリストの復活を悟ります。これまで述べてきたように、イエズスの復活に対する確信が、二人をまるで別人のようにしたことは明らかです。二人はキリストにおける信仰を再び取り戻しただけではなく、キリストの復活に関する証人となる覚悟もできていました。

　これら全ての福音書の合流点は、使徒たちの信仰の基礎となった復活の真実と、宣教の中心に据えられた目撃の真実を証明するものです。

苦しみの神秘的なねうち

◇ 医師と患者の皆さん、皆さんとここにお会いできたことを心から神に感謝いたします。特に、皆さんを代表してお気持ちを吐露してくださった方に心をこめて感謝のご挨拶をいたします。司牧訪問途上、病で苦しむ人々や、病を克服し癒し、軽くしようと努力している人々との出会いは、私の務めであるばかりでなく、私にとって心の慰めでもあります。親愛なる皆さん、私は何よりも皆さんと希望を分かちあうためにここに来ているのです。皆さん一人ひとりは病との戦いに勝ち、病気の惨めさと苦痛を克服しようと強い希望を持っておられます。教会はこういう気持ちを充分承知しています。病者のための祈りで教会はいつも神にこう祈っています。「あなたの聖霊が癒す力を病に伏す人々にお示しください。彼らがすみやかに教会に戻り、あなたへの賛美の歌を歌うことができますように」と。

　この祈りは私の皆さんへの祈りでもあります。私は病に見舞われた全ての人々のためにいつもこの祈りを捧げています。私は、キリストが自らの十字架を担われたことで苦しみの神秘的な値打ちと犠牲がもつ贖いの力を啓示されたのをよく知っているので、病気の人々を特に身近に感じます。キリストはあらゆる人々にふりかかる苦しみを救いの業の中に組み入れられました。そしてどんな種類の苦しみにも恵みと恩寵を見つけることができると公言されました。

◇ 医師と看護婦の皆さん、改めて皆さんに感謝の言葉を申し上げます。皆さんは苦しむ人々に仕えて、痛みを和らげ、絶え間ない看護と献身的な世話で病を癒す仕事に進んで就かれました。医学は神の協力の下、苦しむ人々の基本的人権とその生命を守るためにあります。この国の誇るかの偉大なジュゼッペ・モスカリ博士はこのことをよく理解していました。彼を手本として、福音の示す道徳原理通りに実行するように、謙虚に真心こめて専念してください。そしてキリストとその愛の証から霊感を受けて、皆さんの世話に身を委ねている人たちのための本当の健康管理者としての職務に関する決定を下してください。

　この会合は実に意味深いものでした。私たちの思いは必ずキリストの十字架、十字架に付けられたキリストに向かいます。この十字架と十字架に付けられたキリストがなければ、この世は、人類は、一体どうなっていたでしょうか。十字架と十字架に付けられた人がおいでにならなければ人間の苦しみはいかばかりだったでしょうか。私は皆さんに祝福を送り、この会での喜びに感謝いたします。

(90・7・2)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部八十円　送料実費
■一年予約九〇〇円　送料六〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393